



Title	戦争論と「殲滅」の問題：リデル・ハートのクラウゼヴィッツ批判
Author(s)	石川, 明人
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 129, 1(右)-28(右)
Issue Date	2009-11-27
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39993
Type	bulletin (article)
File Information	ARCS129-001.pdf



[Instructions for use](#)

戦争論と「殲滅」の問題

——リデル・ハートのクラウゼヴィッツ批判——

石川 明 人

はじめに

戦争や戦略に関する議論において、クラウゼヴィッツとリデル・ハートはそれぞれ一九世紀と二〇世紀を代表する人物である。クラウゼヴィッツは『戦争論』（一八三二―三四年）、リデル・ハートは『戦略論』（一九六七年）を主著とし、それらはいずれも世界の多くの言語に翻訳され、今でも広く読まれ続けている¹。本稿はこの二人の思想を分析して、戦争という事象に対する理解の共通点や異なる認識について検討をするものである。だが一言に戦争といってもそれは極めて巨大な問題であって、二人もそれぞれ広範囲な議論をしている。そこでここでは、特にクラウゼヴィッツの殲滅戦理解に対するリデル・ハートの批判を考察の糸口とすることにしたい。

以下では、まずはじめにリデル・ハートによるクラウゼヴィッツ批判の内容を整理する。次にクラウゼヴィッツの『戦争論』を再考してリデル・ハートの批判の妥当性を検証し、その上で両者の戦争理解の特徴や差異について考察する。最後にはごく簡単に、戦争理解と戦略形成において両者に共通する今後の課題を付け加えておぼすびとしたい。

この二人において戦争そのものを根絶しようという絶対平和主義的議論は皆無と云ってよいが、両者はともに戦争の統制や戦争規模の制限にかかわる議論をしており、その意味では以下の考察は戦争研究であると同時に広義の平和研究でもある。

一 リデル・ハートのクラウゼヴィッツ批判

まずは一九三四年の『ナポレオンの亡霊』²からリデル・ハートによるクラウゼヴィッツ批判の内容を見ていくことにしよう。この著作は彼が一九三二年から三三年にかけてケンブリッジのトリニティ・カレッジでおこなった講演「一八世紀から二〇世紀にかけての軍事思想の動向と、それがヨーロッパ史に与えた影響」に加筆をしたものである。この講演の年はクラウゼヴィッツの『戦争論』からちょうど一〇〇年目にあたる。

リデル・ハートはまず冒頭で、思想というものが個人の行動や社会的事象におよぼす影響を明らかにすることは常に必ず容易であるわけではないが、「戦争」は思想とその実現との因果関係を合理的に追及しうる分野であるとする。そしてここでは特に、フランス革命とナポレオン帝国、および一九一四年からの第一次大戦について、兵術思想とその展開を把握しようとする。この後者の分析で特に焦点として扱われるのがクラウゼヴィッツである。実はリデル・

ハートは、一九世紀から二〇世紀にかけて影響を与えた戦略思想家として、ジョミニとクラウゼヴィッツの二人を挙げている。だがリデル・ハートによれば、ジョミニの議論は幾何学的であって誰でもきちんと検討をすればすぐその誤りに気付くのに対し、クラウゼヴィッツの議論は形而上学的でそれを理解するのが必ずしも容易でない上に、用いられる概念や文章が強い印象を残すため、結果としては後者の方が罪が重かったと評価する。ではクラウゼヴィッツは後の戦争にどのような悪影響を与えたというのだろうか。

リデル・ハートはまずクラウゼヴィッツについて、「もし彼の影響と強調点を重視するなら、誰でも彼を歴史上において大量集中 (mass) と相互虐殺の救世主 (Mahdi) と評するだろう」という。リデル・ハートは一貫してクラウゼヴィッツの思想を「決着がつくまで戦うという〈絶対戦争〉の教義の源泉」と見なし、とりわけ第一次大戦における悲惨な殺戮の原因を彼の思想に求めるのである。「絶対戦争」という概念はクラウゼヴィッツが『戦争論』で用いたものであり、端的にいえば、どちらかが殲滅 (Vernichtung) させられるまで戦いが続けられる極限の戦争形態をさす。そのような戦争のあり方を主張して世界に悲劇をもたらしたことを「救世主」という皮肉な表現で非難しているのである。『戦争論』では、「戦争とは、異なる手段による政治の延長に他ならない」というテーゼが最もよく知られており、彼の戦争理解の特徴は、戦争をあくまで政治の「道具」として理解した点にある。だが同時にクラウゼヴィッツは「戦争」を、「拡大された決闘」であり「敵をしてわれらの意志に屈服せしめるための暴力行為」であるとも述べ、それは理論的にはどちらかが殲滅させられることでようやく決着がつくものだとされる。リデル・ハートはそうした彼の議論をさして、もし戦争が政治の延長であるならば、それは必然的に戦後の利益を考えて行われねばならないはずなのに、枯渇するまで国力を使い果たすのでは政策を破綻させてしまうことになり矛盾である、と指摘する。クラ

ウゼヴィッツは戦略の唯一で真の目的は敵軍の破壊に他ならないという原理をゼロから生み出したのではないにしても、少なくともそれを大いに発展させた人物であるとされ、リデル・ハートによればクラウゼヴィッツは「終戦までは考えたが、戦争の結果としての平和については考えていなかった」とされる。リデル・ハートは、ヨーロッパ史の方向を左右したのはクラウゼヴィッツによるこの「絶対戦争」という抽象的概念の影響に他ならなかったとし、クラウゼヴィッツは「その抽象的観念には現実が制限を加えるということを認めながらも、抽象的観念を実際の戦争指導上の理想像とする傾向があった」というのである。

ただここでいったんわれわれは、リデル・ハートの青年時代について簡単知っておく必要がある。リデル・ハートは第一次大戦勃発のときはケンブリッジ大学に在学中だったが、すぐに大学の将校養成センターで訓練を受けて軍に入り、一九一四年の一月から歩兵連隊の少尉として西部戦線にいつている。一九一六年七月にはソムムの戦いに参加しており、おそらく二二歳のときのこの体験が、彼の人生に決定的な影響を与えた。ソムムの戦いは初めて戦車が投入された戦いとしても知られているが、初日だけで約六万人の死傷者を出し、イギリスの戦史上、一日の死傷者としては最悪のものであった。この日に同じ部隊で将校として生き残ったのは、これで三度目の負傷となったリデル・ハートともう一名だけだったらしい。彼は負傷後イギリスへ戻り、歩兵戦術に関するパンフレットや公式の『歩兵操典』などを作成するようになる。そして三二歳のとき大尉で退役し、その後は作家やジャーナリストとして活躍し、『モーニングポスト』『デイリーテレグラフ』『タイムス』の軍事問題担当記者などもつとめた。また陸軍大臣の非公式のアドバイザーにもなるなど信頼や知名度もあり、イスラエルの将軍イガル・アロンは彼を「将軍を教える大尉」と表現したとも伝えられている。最近の研究では、リデル・ハートの間接アプローチ戦略という思想を「リベラルな戦

争観」と位置づけ、今日の「欧米流の戦争方法」の生みの親とするのが一般的である。彼のいう間接アプローチ戦略とは、その要点を簡潔にいうと、すなわち敵の軍事力の殲滅を目指すのではなく、敵のバランスを心理的に崩すこと (dislocate)、あるいは敵の力を麻痺させること (paralyze) を主眼とする軍事戦略の方針をいう。具体的には、敵戦闘力との正面からの衝突を避けて、交通、通信、補給線などを目標とすることなどによって最小限の犠牲で最大限の効果を得ようとするものであり、『戦略論』ではそうした発想は日本の柔術にも例えられている。リデル・ハートは軍事思想家としては誰よりも孫子を尊敬しており、思想的にはフラー、コルベット、アラビアのロレンスなどとの影響関係も指摘されている¹⁰。だがその思想形成の根本には、何よりも自らの戦場体験、特にこのソナム攻勢のトラウマがあり、戦争で同じ目的を達成するために必要とされる人的犠牲・物的損害を極小化するにはどうするべきか、という問題意識が出発点としてあったのである。辛い戦場体験に対する不満や怒りが、間接アプローチ戦略の創造につながり、また同時に、その対極にあると彼が考えたところのクラウゼヴィッツに対する強烈な批判としてあらわれたのである。

さて、リデル・ハートによれば、本来は戦争においては、司令官たちにはまず有利な状況や戦機を醸成するように思考、判断させねばならないのに、クラウゼヴィッツの「福音」は、何よりもまず戦闘へと煽り立てるように作用したとされる。クラウゼヴィッツは戦闘を「真の戦争らしい活動」にすることでもって、結局は戦争術を大量殺戮の技巧に貶めたというのである。リデル・ハートは、「クラウゼヴィッツの教義の要石となっているのが「絶対戦争」の概念だが、これは彼の思想のうちで最も極端で、また最も非現実的なものであった¹¹」という。この概念は、相対する軍の一方が完全に力を消尽してしまうまで戦うような戦闘であり、実際には勝者の側も勝利の戦果を十分に収穫できなくなるほど力を消耗してしまうことになるというのである。「絶対戦争」とはリデル・ハートによれば「戦争指導者さ

えもどこで終わりにすればよいかわからないような戦争¹²に他ならない。ところが『戦争論』を愛読しクラウゼヴィッツの信奉者であることを自称したモルトケによって指導され大勝利をおさめた一八七〇年の普仏戦争の成果は、結果として人々にクラウゼヴィッツを支持ないし擁護させることとなり、「クラウゼヴィッツという神聖な名前」は議論の余地のない真理とされるようになっていき、また危険なまでに戦争に無知な世代の政治家にもすんなりと受け入れられていったという。そしてクラウゼヴィッツの哲学は世界大戦をもたらず手助けをしてしまい、政治家たちは自ら戦争に無知であるというひげ目のため、何ら理性的裏づけを持たない「軍事的理由」のいいなりにならなければならなかった。戦争に突入してからも、戦争を絶対戦争の概念で規定されたのでどうすることもできず、結果として「戦争とは政治の継続である」という彼の言葉は、好戦的政策を後押しするためのキャッチフレーズとなった、というのがリデル・ハートの分析である。

だが、第一にこのようなリデル・ハートのクラウゼヴィッツ批判は『戦争論』の解釈としてそもそも適切なのだろうか。また第二に、これはリデル・ハート自身の解釈であるのか、それともこれまでの『戦争論』の読者たちがしてきた誤解とその影響を彼が論じているに過ぎないのかという疑問もある。一点目についての検討は『戦争論』の詳細な分析になるので次の章でとりあげることにして、ここでは後者について考えておきたい。

『ナポレオンの亡霊』では、一方ではリデル・ハート自身がクラウゼヴィッツをこのように解釈しているようであるが、また同時に、自らは正確にクラウゼヴィッツの意図を理解しているものの、多くの『戦争論』の読者はクラウゼヴィッツを誤解し、その歪曲がヨーロッパ史にネガティブな影響を与えたといっているようにもみえなくもない。例えばリデル・ハートは、「もし彼の本が、そのタイトルのとおり、戦争指導の実践的ガイドブックとしてではなく戦争

の本質に関するものとして考察されていたならば、その害悪を避けることができたであろう¹³と述べ、また、「おそらく読者の百人中一人として、彼のこの巧妙な論理にはついていけないかったであろうし、またこうした哲学的曲芸の中で適切なバランスを保つことはできなかったであろう¹⁴」という言い方もしており、クラウゼヴィッツ自身というよりは、むしろ多くの読者たちによる誤読を問題にしているようにも読めるのである。だが『戦争論』の誤解がヨーロッパ史に不幸な影響を与えてきたというのであるならば、クラウゼヴィッツ自身に対しては、せいぜいのところ誤解を招くような書き方をしたところが問題だという話になるはずであろう。リデル・ハートは『ナポレオンの亡霊』のしばらく後に書いて主著となった『戦略論』においても、ほぼ同様のクラウゼヴィッツ批判を繰り返している。ここでは「クラウゼヴィッツの弟子たちは、その教えを師が意図しなかったところまで極端に押し進めてしまった」、「あらゆる分野の預言者や思想家においては、誤解されるということは共通の運命であった」とも述べ、クラウゼヴィッツを誤解した人々に対する批判という色彩が鮮明になっていくようにも感じられる。しかし、同時に彼は、クラウゼヴィッツの次のような言葉、「博愛主義者たちは安易にも、多大な流血なしに敵を武装解除し圧倒するためのうまい方法が存在し、それこそが戦争術の正しい方向性であると想像するだろう。この誤謬は根絶しなければならぬ¹⁵」という一節を引用して、クラウゼヴィッツ自身の批判もしている。そしてここでもクラウゼヴィッツの議論を「哲学的曲芸」と呼び、彼の「流血なしに征服を為し遂げた将帥らに教訓を求めるな」、「偉大にして全面的な戦闘のみが偉大な結果をもたらすのだ」といった印象的な言葉が、ただでさえ不明瞭なクラウゼヴィッツの議論をますますぼかしてしまい、後の軍人たちに対して、有利な戦機の構築よりはしやにむに戦闘を求めるような態度を形成させたと述べている¹⁶。クラウゼヴィッツの言葉は今後も無数の戦争指導者によって失敗の口実にされ、彼らの猪突攻撃による無益な人

命浪費を正当化することにさえ利用されていくだろう、ともいう。

このような叙述からすると、リデル・ハートが批判したのは、一方ではこれまでなされてきた『戦争論』に対する誤解のようでもあるが、しかしまた同時に、クラウゼヴィッツ自身の「哲学的曲芸」に対しても明らかに批判的であったとも言える。もし、もっぱらこれまでの読者たちの誤読こそが問題だという主張なのであれば、むしろリデル・ハートはそこでクラウゼヴィッツについての正しい解釈を示して彼を弁護する義務もあるはずだが、そのような議論はいずれの著作でもなされていない。このことが、やはりリデル・ハート自身がそのようにクラウゼヴィッツを読んでいたことの間接的な証拠であるようにも思われる。

では、次に検討すべきなのは、リデル・ハートのクラウゼヴィッツ理解それ自体の妥当性である。クラウゼヴィッツが『戦争論』で試みたのは「戦争の本質」あるいは「戦争の哲学」を論じることであったが、それは本来にリデル・ハートがいうように殲滅戦の奨励だったのであろうか。

二 絶対戦争と現実の戦争

『戦争論』はおよそ八〇〇頁にわたる大きな著作であるが、これは基本的に未完のものである。クラウゼヴィッツの死後に、残されていた草稿を妻のマリーが編纂して出版したのが現在のこれであり、生前にクラウゼヴィッツが残したメモによれば、彼はこれらの大幅な書き直しを望んでいた。全体は八つの篇から成っているが、著者自身が完成していると思なしたのは第一篇第一章だけであった。しばしばこの著作の印象的な一文が抜き出されて様々な読まれ方

をされる理由は、ただでさえ抽象的な議論であるうえに未完であつて、曖昧で矛盾した部分も多いため、それらの記述が戦争に関心をもつ読者の様々な想像力をかきたててしまふ点にあるともいえる。だがそれでも全体を注意深く読んでいけば、ある程度は著者の真意を整理することは可能である。

クラウゼヴィッツは『戦争論』の冒頭で「戦争とは拡大された決闘に他ならない」、「戦争とは要するに、敵に我方の意志を強要するための暴力行為である」と述べている。そしてここで強調されているのは、戦争とはあくまで「手段」であつて、相手方にこちらの意志を強要することが「目的」であるという認識である。「戦争とは、他の手段による継続された政治に他ならない¹⁸」というよく知られている彼の言葉もその主旨は同じである。さてすでにこのような戦争理解を見ただけで、あくまで「手段」に他ならない戦争は必ずしも敵の「殲滅」ではなくてもよいことになるように思われる。あくまで敵を降伏させてこちらの意志に従わせることが「目的」であるのなら、必ずしも敵の戦力を完全に無にするまで戦闘を続ける必要はないと考えるのがむしろ自然であろう。ところがクラウゼヴィッツは、そのような見方を即座に否定する。彼によれば、「博愛主義の精神をもつ人々」は彼我の協定によつて敵を武装解除するか降伏させればよいのだとし、敵に過大の損失を与えることはないというが、それに対しては、「戦争のような危険な事態においては、そのような善良さから生じる謬見こそ最悪なのである¹⁹」と切り捨てるのである。そのような考えは、戦争における粗暴な要素を嫌悪するあまり戦争の本質を無視することに他ならず、無益な上に本末を過つた考えだともいえる。戦争はあくまで相互の暴力行為であつて、そこには「限界はない」のであり「極限までいかざるをえない」のが少なくとも理論的には必然だとされる。戦争とは要するに二個の生ける力の衝突であるから、敵を完全に打倒しない限り、我が方が打倒されることを永遠に恐れ続けねばならないからである。

ただし、クラウゼヴィッツはこれらはあくまで抽象的で理論的な思弁だとして、実際には「現実における修正」が加わり、必ずしも戦争は「極限」まで達しないとも考えている。その理由について、例えば第一篇第一章では三つの理由が挙げられている。まず第一に戦争はそれ自体まったく孤立した事象ではなくそれ以前の国家生活と密接に関係したものであり、人間の心身も不完全なものであるから、彼我の判断や行動は必ずしも絶対的の最善を選ばない。第二に、戦争はただ一回の決戦もしくは同時に行われる数回の決戦だけで終るものではないから、その戦闘だけに全ての力をつぎ込むことは普通はない。そして第三に、戦闘の後に続いて起こる政治的状态に対する顧慮というものが戦争に影響を与えるため、結果的に彼我双方において戦闘を極限にいたらしめる可能性は低減するという。こうして実際の戦争においては、相手の戦力を完全に無力ならしめて完全に相手を打倒するという意図は弱まり、政治的目的というものが大事だということになる。戦争の動因としての政治的目的は、軍事行動によって達成されねばならない目標の尺度であり、また戦争にかける力の大きさの尺度でもあるというのである。²¹ こうした理解から、「共同体における戦争、特に国民、文明的な国民のあいだでおこなわれる戦争は、常に政治的目的から始まり、政治的動因によって惹起される。だから戦争とは政治的行為なのである」²²、「戦争は単に政治的行為であるばかりでなく、政治的道具でもあり、異なる手段をもって遂行される政治的交渉の継続なのである」²³といわれるわけである。クラウゼヴィッツは、戦争とはそれ独自で存在するものではなく、あくまで「政治の道具」と見なさねば、戦史の叙述と矛盾するとも述べている。つまりこれは、戦争は政治に従属すべきであるという規範論を主張しているのではなく、戦争の本質についての叙述なのである。

そしてクラウゼヴィッツによれば、戦争において国民の心を動かすものは「政治的目的」であり、またそれが戦争

の尺度として認められるのはそれが国民に及ぼす影響に関連する場合であるという。したがって戦争を考えるとときは、政治や軍だけでなく、国民の性質も考察対象として外すわけにはいかなくなる。彼は次のようにまとめる。すなわち戦争とは、まずは原始的な暴力行為であつて、ここには盲目的な自然的本能ともいえるような憎悪や敵意の側面もあり、二つ目には蓋然性と偶然性による賭け事の側面があつて、これが戦争を精神的な営みにもしている。そして三つ目に、政治的な道具という従属の本質をもつのであり、これによって戦争は知力の仕事にも帰せられる。以上の三点はそれぞれ、国民、司令官たち、政府、という三つに当てはめられている。要するにクラウゼヴィッツは戦争をこれら三者によって形づくられるものとしていたのであり、もちろん三者それぞれが関与する割合はその都度変化はするが、いずれか一つを無視することは決してできないと考えていた。こうした点を考慮するならば、彼の「戦争とは継続された政治である」という言葉だけを強調して紹介することは誤解を招きやすいともいえよう。なぜなら彼は戦争を、政治だけでなく、国民と軍と政治家という複数の要素によってダイナミックに形成される事象だと考えていたからである。

このように、現実において戦争は動的で複雑な三重性によって遂行されるため、抽象的な理論における戦争モデルがそのまま実現するわけではないとされる。クラウゼヴィッツの議論は、まず抽象的なモデルを示してからそれに対する現実の諸条件を示していくというスタイルでなされている。それは、戦争とは極めて多くの要素が複雑に絡み合つて成る事象であるため、理論的な分析こそが戦争の普遍的な理解に有効であると彼が考えていたからである。確かにクラウゼヴィッツは、「敵兵力は殲滅せねばならない。すなわちもう闘争を継続できない状態に追い込まねばならない」²⁴などとも述べている。ところが少し後の文章で、こうした議論はあくまで「抽象的な戦争」の目的であるとし、敵を

完全に無力ならしめることは、確かに究極的な手段ではあるが、それは実際に講和を締結する際の必須の条件ではないなどとも述べているのである。²⁵むしろ彼は、敵側の同盟諸国を離反させたり、あるいは同盟諸国の援助を中止させたり、また他方で自分たちに加担する同盟を募ったり内外の政治的機能を活発に働かせることでこちらに有利な結果をもたらすように仕向けるなどの手段があることにも触れている。これはむしろ、リデル・ハートにも強い影響を与えた孫子の兵法における「上兵は謀を伐つ」「交を伐つ」などの発想に近いともいえるだろう。²⁶クラウゼヴィッツは複数個所で「敵の鎮圧がすなわち政治的目的を達成するための唯一の手段だというわけではない」、「戦闘というものが敵戦闘力の鎮圧を本務とする際の構成要素であつても、必ずしも殲滅が第一の目的として求められるわけではない」という言葉を繰り返してもいる。とはいえ、また別の箇所を見れば、彼は殲滅を必然であると考えたと解されても仕方がない叙述もある。「要するに敵戦闘力の殲滅こそが戦争において追及されうる全目的のなかで常に支配的なものとして現れる」というような表現は他にも多く見られるので、恣意的に『戦争論』の数箇所からいくつかを引用すれば、彼を殲滅至上主義者として紹介することも、またその逆もできてしまう。明らかにクラウゼヴィッツの書き方には問題がある。

「戦闘」について述べている第四篇においても微妙な議論が繰り返されている。クラウゼヴィッツは次のように述べている。「敵の克服とは何か。それは常に敵戦闘力の殲滅に他ならない。それが殺害や傷害によるのかまたは他の手段によるのか、あるいは完全な殲滅かまたは闘争を継続できない程度にするのかは問題ではない。戦闘の特殊な目的を度外視するなら、われわれは敵の完全なあるいは部分的な殲滅を全ての戦闘の唯一の目的と見なすことができるのである」。²⁹ここでいわれている「殲滅」という言葉の使われ方は、必ずしも敵の存在を根絶するという意味ではなく、言

葉を換えれば「無力化」という程度の意味に近いのかもしれないが、しかし彼はこの著作全体を通じてあくまで「殲滅」(Vernichtung)という言葉を使い続けていることはやはり無視できない。

クラウゼヴィッツによれば、フランス革命以前には、敵戦闘力の殲滅が必要でなくなれば戦争理論は戦闘という卑しい手仕事の域を脱して、より高尚なものにすることができると考えられ、そうした「謬論」を助長するような議論が多く案出されたという。だが敵戦闘力の殲滅を他のもので代替しようとすることは誤った前提に基づく誤った有効性の認識であるとして却下される。小規模だが巧妙に行われる攻撃によつて敵の動きを封じて、巧みに敵をこちらの意志のとおり操るやり方を否定はしないというものの、「しかしわれわれは敵戦闘力の直接的な殲滅をいかなる場合でも優勢なものであると主張する。われわれがここで殲滅原理について主張したのはこの圧倒的な重要性のために他ならない³⁰」というのである。このような叙述をみていく限り、やはり彼は殲滅を至上のものとしていると解釈することも十分可能であるようにも思われる。しかもクラウゼヴィッツはさまざまな文章でそれを表現する。例えば、「人々は流血を伴わない戦争を遂行する司令官こそ栄冠を受けるに値するといひ、戦争の理論とは、真正正銘のパラモン教徒のように、これを教えるものであるべきだと主張する。歴史はこの妄想を破壊したが、しかしこれが再びあちこちに現れ、戦争の指導者を、人間の弱さを受け入れる、まことに人間らしいものに引き寄せるかもしれないのである³¹、という。またこれと近い箇所では次のようにも述べている。「人間の血を見ない司令官の言葉など聞きたくない。流血の戦いは耐え難い光景だとしても、それは戦争を評価する理由になるだけである。こちらの腕を切り落とすような鋭い剣をもつ者がやってくるまで、人間性なるものによつて自分の剣の刃を段々と鈍らせておいたりしない³²」。これらの部分を見ていくと、クラウゼヴィッツの殲滅戦至上主義は間違いないような印象を受ける。

しかし最後の第八篇において戦争全体に関する議論に戻ると、この点に関する考え方は再度あらためられているようにも見える。というのも、クラウゼヴィッツはここで「絶対戦争」の概念を示してそれを「現実の戦争」と対置させることで、自らが述べた抽象的な戦争理論はやはり必ずしも現実化しないということを論じているからである。彼によれば、戦争は国家生活におけるさまざまな事象や力関係の複雑な絡み合いにより、厳密な論理にしたがう哲学的論理から逸脱するという。戦争の当事者たちは、その時どきの支配的な思想あるいは感情などによって判断や行動をするものであり、それによって戦争の形態が左右されると考えざるをえないとされるのである。したがって戦争の準備やその遂行においては極めて多くの事柄を考慮する必要がある。純粹に客観的な事実ばかりでなく、政治家や軍人の知的ならびに情意的事柄も影響を与える状況のなかで、何が重要であるかを見極めながら諸要素を比較検討して得失を予測することは「天才の光明」のみが解決しうる課題であるとも述べている。³³このように「絶対戦争」をひとつの指標として用いることはするにしても、戦争は実際には抽象的理論の必然のとおりに移していくものではないという。そうであるならば、「拡大された決闘」である戦争において「殲滅」は現実にはそれが必然ではなく、またそれを規範的に求める理由もないことになるであろう。

以上のように、『戦争論』の主張には明らかに揺らぎがある。リデル・ハートが『ナポレオンの亡霊』のなかでしているように、『戦争論』からクラウゼヴィッツの殲滅至上主義的な言葉を集めてくることは十分に可能ではある。現に多くそのように書かれている以上、それも一概に恣意的な解釈だとは言いつれない。しかし、それがクラウゼヴィッツの思想の最終的な形態であったと断定することには慎重であるべきであろう。彼において「殲滅」は、理論的レベルでは戦争の必然であり、またしばしば重視され、しかもそれを回避しようとする「博愛主義者」に否定的でさえあつ

たが、しかし最終的にはその戦争理論が必ず現実化するとはしていなかったし、また現実化させるべきだともされてはいなかった。

ここで確かな結論としていえるのは、クラウゼヴィッツがわれわれに残したのは、あくまでも不明瞭な議論だということだけであろう。彼は「殲滅」それ自体については曖昧な議論をした、というのにとどめておくのがテキスト解釈としてはおそらく最も妥当である。繰り返しになるが、『戦争論』はあくまで未完の著作であり、それを十分に考慮にいれて読まねばならない。リデル・ハートによれば殲滅戦の奨励は、戦争とは政治的目的のための「手段」に他ならない、というクラウゼヴィッツ自身の主張と矛盾するという。確かにその通りである。しかし、このようなあまりに明白な矛盾に本人が最後まで全く気が付かないということが果たしてあるだろうか。政治的目的のための「手段」としての戦争という理解は、『戦争論』の全体をとおして最も一貫している主張である。そのことを考えるなら、筆者はどちらかといえば、リデル・ハートの解釈の方に懐疑的にならざるをえない。

三 戦争認識の差異

すでに触れたように、リデル・ハートは第一次大戦における悲惨な殺戮をクラウゼヴィッツの責任であるとした。彼に対する批判を研究のエネルギーにして戦略思想を構想したようにもみえる。だが前章のとおり、クラウゼヴィッツの議論は、実はリデル・ハートが思い込んでいたほど悪でも野蛮でもなく、それが本当に大量殺戮の原因であったとは言い切れない。そもそも、たった一人の思想家の戦争理解が、政治的状况も国際関係も、また科学技術も工業力

もまるで異なる約八〇年後の世界大戦における戦略形成に決定的な影響を与えたとする主張には無理がある。ましてや、クラウゼヴィッツの戦争哲学が、誤読されたという点を含めたとしても、第一次大戦の「勃発を促した」とするのはもはや妄想であろう。そうした意味では石津朋之氏のいうように、リデル・ハートはクラウゼヴィッツをあまりに過大評価していたと言わざるをえない。³⁴

だが誤解や誤読それ自体よりも、両者の関係についてここで指摘されるべきなのは、リデル・ハートがクラウゼヴィッツ批判を原動力として生み出した間接アプローチ戦略の思想それ自体が、実は皮肉にもクラウゼヴィッツの思想の、特に『戦争論』第八篇の枠内に整合的に位置づけられるということである。クラウゼヴィッツは第八篇で、戦争は「絶対戦争」ではなく「現実の戦争」にならざるをえないことをいう際に、そのようにならしめるのは、その時代その時どきに支配的な思想や感情など戦争に制限を加える独自の条件であると述べている。彼は、「いかなる時代もその時代に独特の戦争を行い、戦争に制限を加える独自の条件を具備し、また独特の偏見をもっている」として、「各時代にはそれぞれ特有の戦争理論がある」³⁵のだという。それが「現実の戦争」である。すなわち、戦争論者や戦略思想家の存在そのものも、それぞれの時代の戦争の要素ないしは条件として考えられているわけである。すると、二〇世紀にリデル・ハートのような人物があらわれてそれまでの戦争のありようを批判し、新たな戦略を提唱したということそれ自体が、クラウゼヴィッツにおいては予測の範囲内であったともいえよう。もちろん間接アプローチ戦略などクラウゼヴィッツ自身は思いもつかなかったが、それぞれの時代に何らかの戦争の理論が現れ、それが戦争のありようを左右することは十分に考えられていた。すると、結局リデル・ハートは必ずしも適切とはいえないクラウゼヴィッツ批判を原動力にして思索しながら、気付かぬうちにクラウゼヴィッツが議論したことの一部を担っていたと

もいえる。

そしてもうひとつ、リデル・ハートのクラウゼヴィッツ批判には、戦争について思索する際の姿勢そのものの特徴があらわれていることも十分に確認されねばならない。クラウゼヴィッツの『戦争論』には確かに繰り返しや矛盾や不明瞭な議論が多く、また明らかに不必要ではないかと思われるほど戦場の具体的事柄に関する記述もあるが、それでも彼自身はあくまで戦争の「本質」、あるいは戦争の「哲学」について論じることを狙いとされていた。それに対してリデル・ハートが戦争について議論をする際に主眼としたのは、戦争の「本質」でも「哲学」でもなく、むしろ「原則」を示すことであつた。『戦略論』で数々の戦史を例に示される彼の間接アプローチ戦略は、軍事戦略の根本的なあり方、あるいは戦争遂行において指導者が取るべき基本的な姿勢だといえる。だがそうした議論の目的や枠組みに加え、より根本的な戦争認識において両者には一つの違いが見られる。

リデル・ハートは次のように述べている。「武力行使は極めて注意深くなされた計算によってコントロールされないかぎり、悪い循環をなす。あるいは循環というより螺旋状に進行するものである。戦争は理性の否定によって始められるものであるから、その戦いの全段階を通じて、理性の否定を正当化するようになるのである」³⁶。このような見方について、クラウゼヴィッツの理解はリデル・ハートと少々異なる。クラウゼヴィッツにおいて戦争はあくまで政治的交渉の継続であり、宣戦布告をしたとしても両国間でコミュニケーションが断絶するわけではない。彼は、「戦争とは〔政治について〕考えていることを、ただ文書や議論とは別の手段で行うことに他ならないのではなからうか」という³⁷。クラウゼヴィッツによれば、戦争とは独自の完結した営みではなく、あくまで或る全体の一部と見なされねばならないのであり、その或る全体というのが政治に他ならない。そのことを彼は、「戦争はもちろんそれ自体の文法を有する

が、しかしそれ自体の論理をもつわけではない」とも表現し、これもクラウゼヴィッツの戦争理解を端的に示すものとしてしばしば引用される。こうした点から、クレフェルトのように、クラウゼヴィッツは戦争を善なるものとも悪なるものとも捉えていなかったと解釈することはおそらく正しい。³⁸ リデル・ハートも戦争と政治との関係をクラウゼヴィッツと同様に強く認識していたが、しかし彼は戦争を「理性に反するもの」と前提することにより、なおさら理性による統制の必要性を説いたという点で、明確には述べていないものの、クラウゼヴィッツとくらべれば戦争を悪だと捉える傾向が強かったと思われる。さらにリデル・ハートにおいては、クラウゼヴィッツよりも「平和」についての言及が多い。リデル・ハートの思索の原点は、仮に戦場で勝利をおさめたとしてもそれが結果として味方の多大な犠牲を強いるものだとしたら何の意味があるのか、という思いであり、だからこそ、戦後の平和構想なき戦争指導は無意味である、ということが強調される。彼は、「戦争の目的というのは、たとえ一方の側からの見方だとしても、より良い平和の状態を得ることである。それゆえ、戦争の遂行にあたっては常に自らの望むところの平和を念頭に置き続けて戦争を指導することが不可欠である」という。リデル・ハートにおいてはなるべく戦闘を最小限に抑えることが「理性的」であり好ましいのであって、それは大きな悪に対抗するために小さな悪を用いるという正当戦争論(just war theory)的発想の延長線上にある軍事戦略レベルでの議論だといってもよいかもしれない。彼は次のようにいう。「戦争は理性に反するものである。というのは、戦争とは討議によって合意の解決に達することに失敗した場合に武力でその係争を解決しようとする方法だからであり、よって戦争の目的を達成するためには、戦争遂行は理性によって統制されなければならない」⁴¹。戦争は理性の否定から始まるがゆえにその遂行は理性による統制が必要だとされる。だが「統制」とは結局戦争への積極的なかかわりであるともいえ、そうした意味では間接アプローチ戦略は極めて能動

的な戦争形式だとも捉えられる。

重要なのはこうした戦争理解の前提が「攻撃」と「防衛」に関する認識とも連関することである。クラウゼヴィッツは『戦争論』で、明らかに「防衛」を「攻撃」よりも重要視している。彼によれば防衛は攻撃よりも強力な戦争形式であり、「戦争の自然な経過は、防衛をもつて始まり攻撃をもつて終るものである」とされる。⁴²とはいえ、彼によれば純粹な防衛（彼の言葉では「絶対的防衛」というものはないのであり、防衛はあくまで後の攻撃を前提としてのみありうるものであり、「戦争が単なる我慢ではないことは明白」⁴³だとされ、「攻撃への素早く力強い移行、攻撃に移行すること、即座に敵に酬いることが防衛の重要なポイントなのである」⁴⁴とも述べている。だがそれでも『戦争論』では「防衛」が「攻撃」よりもはるかに詳細に論じられており、防衛の戦争形式としての優位性、強力さについて詳しいほど繰り返されている。ここではその詳細には触れないが、注目に値すると思われるのは次の点である。すなわち、クラウゼヴィッツによれば、温和な防衛者よりも侵略者の方が先に戦争を決意することは言うまでもないが、戦争に対する心がまえは侵略者の側よりもむしろ防衛者の側にあるとされることである。侵略者の侵入があつてはじめて防衛が発動し、防衛と共に戦争が発生するからである。侵略者の目的は戦いではなく、あくまで相手の土地や財産を奪うことに他ならないため、穏便に侵入を成し遂げることはむしろ侵略者の望むところである。そうした点を指して彼は「侵略者は常に平和を愛好する」⁴⁵とも表現する。しかし侵略者のそうした行為を許すことができないからこそ防衛者は戦闘をせざるをえないのであり、したがって弱いものの方が戦争の準備を整えていなければならなくなる。そこで彼は、戦争の発生を哲学的に考察するならば次のようにいえるという。すなわち、「本来の戦争という概念は、攻撃と共に発生するのではない。なぜなら攻撃は闘争ではなくむしろ略取を絶対的目的とするからである。戦争の概

念はむしろ、防、御とともに発生する。というのも、防、御は闘争を直接の目的とするからである⁴⁶。防、御とは相手から何を奪い利益をあげることが目的のではなく、自分たちにマイナスを発生させないための行為に他ならない。だからこそ、そこでは純粹に戦闘行為こそが目的となるのだ。したがって「戦うこと」が戦争に他ならないとするならば、まさに防、御こそが戦争の始まりであり中心だといふのである。

ただし、そもそも「攻撃」や「防、御」はきわめて相対的で主観的な概念である。クラウゼヴィッツ自身も、絶対的防、御などありえないと述べているとおり、これはあくまで便宜的な区分に過ぎない。ある行為が攻撃であるか防、御であるかは、空間的・時間的な区切り方によっても異なるであろうし、またどちらの立場に身を置いて考えるかによっても異なる。彼の攻撃と防、御に関する議論についてはあらためて批判的に検討する必要があるだろう。だが差し当たり以上のような防、御と攻撃の関係をみるならば、クラウゼヴィッツがとどころで殲滅戦を奨励するかのような言葉を残した原因の一つは、彼が戦争を、まずは純粹な戦闘としての「防、御」の側から考え始めたからではないかとも思われる。防、御の目的は戦闘以外のなものでもないから、防、御を第一に念頭においた戦争においては、相手を完全に壊滅することだけが確実な目的達成となる。その意味では確かに「殲滅戦」は正しい。しかし彼自身が述べているように純粹な防、御というものはありえず、それは後に攻撃へと転ずるものでなければならぬ。するとそこでは必ずしも「殲滅」に拘る必要はなくなるのであり、したがって『戦争論』における殲滅戦を否定する文章も一方では十分に意味をもつようになる。一方リデル・ハートは、述べたように、理性によって戦争を統制することの重要性を主張した。その統制の具体的な方針あるいは原則が、間接アプローチ戦略である。理性によって主体的にコントロールされるべき戦争は決して受動的ではありえず、むしろ能動的でしかありえない。少なくとも彼の思想は、闘争を直接の

目的とするというクラウゼヴィッツ的な意味での「防衛」ではない戦略であるからこそ、「殲滅」という発想を否定することが可能となったといってもよいだろう。

四 戦争理解と戦略形成の課題 —— むすびにかえて ——

クラウゼヴィッツの戦争論とリデル・ハートの戦略論は、議論の意図や目的が異なるというだけでなく、基本的な戦争認識それ自体にも違いが見られることは以上のとおりである。では最後に、ごく簡単に、戦争理解や戦略形成において二人の議論に共通していえる今後の課題について触れておきたい。

多くの研究者が指摘しているように、現代はクラウゼヴィッツの時代ともリデル・ハートの時代とも異なり、国家対国家の大規模な軍事衝突の機会や可能性は減ってきており、代わりにゲリラ戦、テロリズム、あるいは低強度紛争と呼ばれる形態の武力衝突が多くなってきている。そうした中であらためて重要性をもってくるのは、彼らがほとんど議論しなかった種類の戦争の「目的」である。それは彼らが想定したような社会の利害としての「政治」とは異なる、より非合理的なものである。戦争とは確かに何らかの利害関係を軸に生起するが、そこには他にも「宗教」や「民族」や「正義」など非合理的な要素も深く関わる。例えば宗教は、戦争の原因ではなくても、戦争や武力行使における道徳観や正当化の基盤となり、全体のありようを大きく左右する。またそもそも戦争の遂行においては、それに関わる人々に、必要とあらば自らすすんで命を投げ出すという自発的意志が必要とされる。人間は戦う覚悟をもっており必要であるなら死をも厭わずに行動しようという過去の多くの事例が、人間は利己的な関心や利害関係からのみ戦

いに身を投じるのではないことを示している。ここに、軍隊という組織が単に戦勝のみを至上とする合理的集団ではなく、むしろ非合理的ともいえるような伝統、名譽、あるいは何らかの美学を重視する組織であるという理由がある。しかしリデル・ハートは、クラウゼヴィッツの誤りを正すつもりでいたものの、政治的目的の「手段」としての戦争理解という根本的な土台は自らの批判対象と同じであり、その思想も基本的には合理的な、あるいは西欧的な戦争理解なのであった。

こうした点について、ジョン・キーガンはシンプルかつ適切な批判をしている。彼は『戦争の歴史』のなかで、「クラウゼヴィッツの考えは不完全である。彼の考えには国家と国益、また国益を得るための合理的な計算が前提されているからである」という。キーガンによれば、「戦争とは人類の歴史と同じだけ古いものであり、それは人間の心の最も秘められたところ、すなわち合理的な目的が雲散霧消し、プライドが支配し、感情が君臨し、本能が王であるところに根ざしている」⁴⁸のである。戦争を「文化の発露」だと理解するキーガンの戦争論についてはまた別の場所で詳しく考察するが、湾岸戦争などを「異なつた軍事文化の衝突」と見なすその視点は、クラウゼヴィッツのみならずリデル・ハートへの批判にもなりうる。戦争を文化として捉えるということは、軍事的側面だけでなく、人間や社会に対するトータルな視点から戦争理解や戦略形成を試みるということである。

リデル・ハートの戦略思想は、クラウゼヴィッツの殲滅戦論に対する批判とも不可分であるから、結果的に戦争や戦略を考える上で軍事行動のありようそのものに拘りつづけることになつた。彼の間接アプローチ戦略それ自体はもちろん評価されねばならないが、しかし戦争の理論そのものとしては限定的な視野にとどまつたともいえる。確かに彼は「大戦略」(grand strategy)の概念によって経済的、人的資源のみならず精神的資源の重要性についても触れ、

政治的な圧力に加えて倫理的な圧力という要素の有効性も考えていた。つまり非軍事的手段も用いて戦争を遂行すべきことを十分に意識してはいたが、しかし、やはりその点についての議論を十分に展開することはなく、基本的にはもっぱらミリタリーからの視点に集中したといえる。クラウゼヴィッツは戦争を「国民」「軍人」「政府」の三つから形成されると考え、またそれぞれの時代の思想や感情も戦争の重要な要素であるとしていた。しかし実際に彼が『戦争論』でなしたその点についての言及はまだ漠然としたものであり、またそれまでの自らの議論が邪魔となり、十分にその点を掘り下げて考察するにはいたっていない。クラウゼヴィッツは「政治」をなるべく広い意味で捉えて自らの理論に幅をもたせようとはしたが、それでも、「ここでわれわれは政治を社会全体の利害の代表者と見なしてよい」としていた。つまり手段としての戦争という営みを利害との関わりから捉える視点を抜け切ることがなかった。よって実質的に「戦争」を捉える際の視野に関して両者の差はさほど大きくはないともいえる。

ジャン・ウイレム・ホーニツヒとウイリアムソン・マーレーは、同じ論文集に現代におけるクラウゼヴィッツの有効性と限界を考察した論文を寄せているが、二人の主張は一部でよく似ている。両者とも二世紀に戦争という事象を考えるうえで、「文化」という側面を重視すべきことを示唆しているのである。ホーニツヒによれば、軍事力はいまだ特定の文化によって定められた目的のために行使される傾向にあり、また争いの目的は国益の擁護のみにとらわれるのではない。武力行使によって相手がどんな目的を達成しようとしているのか、いつまで戦うつもりでいるのかを理解することが、敵に影響を及ぼす方法や妥協させる方法の発見につながるという。彼はホイジンガの「戦争は政治の道具以上のものであり、文化的に決定されたゲームのような性質を有している」という言葉を紹介しながら、特に西側の世界の軍隊が取り組むべき課題はそこであり、つまり「文化的な現象に対処するために制限戦争における作戦

概念を作り出す」ことだとされる。⁵¹ 端的にいえば、今後の戦略形成には文化研究が欠かせないというわけである。

マーレーも、「戦争で最も重要な問題は、戦闘司令所から戦場の接敵地点にいたるまで、敵の心のなかに何があるかということである」と述べ、⁵² 敵側の言語や文化や宗教や歴史の知識が重要になると述べている。ただし、その際の「文化」研究とは具体的にどのようなように実践されるのかはクリアではない。戦略形成にかかわる将校たちに、戦場となる地域の言語や歴史、あるいは宗教やその他の諸伝統を教育すべきだということなのか、それとも末端の兵士たちにも当該地域の言語や歴史について教育し地域住民との良好な関係を築かせるということなのか、それとも士官学校や大学などで「戦争」や「暴力」や「死生観」等に関する哲学的・社会的・人類学的な諸研究をおこなうことが軍の戦略形成への貢献となるという意味なのか、はつきりしない。しかしこれまでは自然科学や社会科学の側面からなされることが多かった戦争・戦略の研究に対し、人文科学的なアプローチの重要性を指摘していることは注目すべきである。

現代では武力行使は嫌悪される傾向が強いが、しかし国際間の諸問題はなくなるところかむしろ複雑化しており、テロリズム等の脅威も増大している。政治家や軍事的指導者は、単にひたすら全面的な勝利を追及すればよいわけではなく、むしろすべての当事国が受け入れ可能な妥協的和平を模索せねばならない。こうした状況においては、これまで以上に幅広い視点から戦争や戦略を考えることが求められる。そもそも「戦争」あるいは「軍事」とは、良くも悪くも人類に普遍的な営みである。その問題の広さや深さは人間社会における他の領域や分野と同じかあるいはそれ以上であり、これは本来一部の専門家だけのものではなく、もっと多様な研究者や研究方法によって取り組まれねばならない。それが最小限のコストによって最大限の安全保障を確保することの基礎にもなるであろう。一九世紀から

二〇世紀にかけて、クラウゼヴィッツとリデル・ハートがそれぞれ大まかに認識はしつつも、一人では十分に議論を進められなかったのはこの点である。そして今後このような取り組みをしていくうえで求められるのは、広義の「戦争」を、単に軍事専門家だけの問題としてではなく、また道徳的な批判の対象としてでもなく、端的に文化的事象として冷徹に捉える姿勢である。

注

- 1 Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, Nikol Verlag, 2008. (1832-34). Liddell Hart, *Strategy*, second revised edition, Meridian, 1991. (1967). クラウゼヴィッツおよびリデル・ハートの著作については次の邦訳を参照した。ただし本稿における引用はすべて原書からの私訳である。クラウゼヴィッツ『戦争論』(上・中・下)、篠田英雄訳、岩波文庫、一九六八年。および、クラウゼヴィッツ『戦争論』(上・下)、清水多吉訳、中公文庫、二〇〇一年。リデル・ハート『戦略論——間接的アプローチ——』森沢亀鶴訳、原書房、二〇〇八年。リデル・ハート『ナポレオンの亡霊——戦略の誤用が歴史に与えた影響——』石塚栄、山田積昭訳、原書房、一九八〇年 (Liddell Hart, *The Ghost of Napoleon*, Faber&Faber Limited, 1934.)。
- 2 Liddell Hart, *The Ghost of Napoleon*, Faber&Faber Limited, 1934.
- 3 Ibid., p. 120.
- 4 Ibid., p. 120.
- 5 Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, S. 21.
- 6 Ibid., S. 29.
- 7 Liddell Hart, *The Ghost of Napoleon*, p. 121.
- 8 Ibid., p. 124.
- 9 石津朋之『リデルハートとリベラルな戦争観』中央公論新社、二〇〇八年、を参照。

戦争論と「殲滅」の問題

- 10 石津朋之「解題 リデルハート——その虚像と実像——」（『戦略論大系4 リデルハート』芙蓉書房出版、二〇〇二年）二四九頁。
- 11 Liddell Hart, *The Ghost of Napoleon*, p. 143.
- 12 Ibid., p. 143.
- 13 Ibid., p. 124.
- 14 Ibid., p. 125.
- 15 Liddell Hart, *Strategy*, p. 342.
- 16 Ibid., p. 342.
- 17 Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, S. 29.
- 18 Ibid., S. 21.
- 19 Ibid., S. 30.
- 20 Ibid., S. 31.
- 21 Ibid., S. 37.
- 22 Ibid., S. 46.
- 23 Ibid., S. 47.
- 24 Ibid., S. 52.
- 25 Ibid., S. 53.
- 26 『孫子』金谷治訳注『岩波文庫』二〇〇〇年、四六頁を参照。
- 27 Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, S. 60.
- 28 Ibid., S. 66.
- 29 Ibid., S. 238.
- 30 Ibid., S. 239.
- 31 Ibid., S. 279.

- 32 Ibid., S. 280.
- 33 Ibid., S. 701.
- 34 石津朋之「クラウゼヴィッツとリデルハート」、『クラウゼヴィッツと『戦争論』』、清水多吉、石津朋之編著、彩流社、二〇〇八年、所収)を参照。
- 35 Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, S. 712.
- 36 Liddell Hart, *Strategy*, p. 357.
- 37 Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, S. 727.
- 38 Ibid., S. 727.
- 39 マーチン・ファン・クレフェルト(永末聡訳)「現代におけるクラウゼヴィッツの有用性と限界」、『クラウゼヴィッツと『戦争論』』、二七八頁。
- 40 Liddell Hart, *Strategy*, p. 338.
- 41 Ibid., p. 356.
- 42 Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, S. 407.
- 43 Ibid., S. 420.
- 44 Ibid., S. 420.
- 45 Ibid., S. 421.
- 46 Ibid., S. 429.
- 47 John Keegan, *A History of Warfare*, 1993, p. 3. (ジョン・キーガン著、遠藤利国訳、『戦略の歴史——抹殺・征服技術の変遷——』、心交社、一九九七年)
- 48 Ibid., p. 3.
- 49 Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, S. 729.
- 50 ジャン・ウィレム・ホーニッヒ(荒川憲一訳)「クラウゼヴィッツと現代戦略思考の危機」、ウィリアムソン・マーレー(大井知範訳)

戦争論と「殲滅」の問題

- 「コンピュータ時代のクラウゼヴィッツ」、(いずれも、『クラウゼヴィッツと『戦争論』』、所収)。
- 51 ホーニツヒ、前掲論文、三一八頁。
- 52 マーレー、前掲論文、三五三頁。
- 53 例えば現代的問題の一つである宗教的テロリズムの理解とそれへの対策においては、マーク・ユルゲンスマイヤーが以下の著作などでおこなったような宗教学的分析が、間接的ではあっても重要な助言となるだろう。Mark Juergensmeyer, *The New Cold War?: Religions Nationalism Confronts the Secular State*, University of California Press, 1993. (ユルゲンスマイヤー著、阿部美哉訳、『ナショナリズムの世俗性と宗教性』、玉川大学出版部、一九九五年) Mark Juergensmeyer, *Terror in the Mind of God: The Global Rise of Religious Violence*, University of California Press, 2000. (ユルゲンスマイヤー著、立川良司監修、古賀林幸、櫻井元雄訳、『グローバル時代の宗教とテロリズム』、明石書店、二〇〇三年)。